
無音の世界～ココアをさがせ！～

忍足香輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無音の世界〜ココアをさがせ!〜

【Nコード】

N4728G

【作者名】

忍足香輔

【あらすじ】

この世から音が失われた。世界は混乱しつつもどうにか着地点を見つけ、漂うことになる。その世界では変化した日常を生きる変容する人間。彼らがどのような駅にたどり着き、どのような終着を迎えるのか。

プロローグ（前書き）

文字数がかなり多くなると思います。細かく章で分けるつもりですが、携帯では読みにくいかもしれません。パソコンで読むことをお勧めします。時間があれば携帯用にも編集するつもりです。ちなみにホラーではありませんのでお気軽にお読みください。

修正はすべて誤字脱字のみです。投稿した場合、内容の変更はいたしませんのでご安心ください。

プロローグ

とある日曜、僕は机に向かっている。三日後にはじまる期末試験に向けての勉強だ。初日には数学、社会、英語といきなりの山場。教師陣が何を考えていたのか定かではないが、これではこの三教科の平均点が下がるのは目に見えている。一夜漬けのその場限りの勉強ではなく、毎日積み重ねるように勉強する人間を評価しようとしているのかもしれない。それなのに彼らは部活動で汗を流すことを勧める。

時計に目をやり、鉛筆を置いた。頃合いがいい。休憩にしよう。空になったカップを手にして階段を下りる。僕の部屋は二階だ。

一階には誰もいない。僕は一人っ子であり、両親は共働き。いまだき珍しくもない家庭だ。電気ポットからお湯をもらい、インスタントコーヒーを作ってリビングのソファに腰かけた。ふと気づくとテレビがついていた。僕はテレビを観ないから、たぶん母親が消し忘れたんだろう。テレビ画面にはどこかの国の祭りで賑わっている。とても騒がしそうで、楽しそうだ。

けれど僕にとっては無縁の世界。僕はテレビを消した。

二階に上がって再び勉強を再開しようとする。

「……………っ」

耳鳴り。きょうは一段とひどい。

たまにこういうことがある。何の脈絡もなく津波のようにおとずれる。こうなってしまうっては仕方がない、しばらく勉強はお預けだ。ベッドに飛び込んで耳を押さえた。外部からの音を退けようとも、耳鳴りは防げない。わかってはいても、気休めにはなる。

「……………！」

叫んでみたが声にならない。もしかしたら声が出ているのかもしれないが、隣のおばさんが苦情を言いに来ないのだからきっと出ていないのだろう。いや、どうせ苦情を言いにくたところで、僕にその言葉は届かない。

ここは無音の世界。

第一話 成り立ち

いつからか、この世界から音は消えた。

最初は僕、だと思ふ。知る限りで、僕より早く音をなくした人は知らない。だけど、それから一ヶ月もたたないうちにそれが世界中に広がっていることがわかった。その時には僕の世界から音は消え去っていたため、母親が筆談で教えてくれた。母親も父親も例外なく音をなくした。それがいつのことだったのか、正確なところを僕は教えてもらっていない。

僕が無音の世界になれてくる頃には、音を有している人間の方が珍しく、世界の混乱が平定することには、音を有す人間はいなくなつた。

この病を学会では「突発性聴覚閉寡症」と命名したらしいが、それは世間一般に浸透しなかった。ただ単純にマスコミが取り上げた、「無音の病」が通称となっている。

けれどその名を口にする人はもう誰もいない。理由は簡単だ。もはや音を持っている人間はいない。病ではなくなってしまったのだから。耳は聞こえなくなってしまったが、それは誰もがそう。最初は違和感を覚えつつも、いつしかその考えが定着してしまった。

世界の混乱は凄まじかった。

音がなくなっても僕個人の生活に大きな影響はない。強いて上げれば音楽を聴けなくなつて残念なことぐらいだ。けれど世界の多くは音に頼った生活をしている。例えばさっき上げた音楽にしてもそう。ミュージシャン、作曲家、ピアニスト、オーケストラ、彼らは職を失う。

観衆の耳に訴えかけ感涙を誘う彼らにとって、音は何よりも欠かせないものであつた。それがなくなつてしまえば、どれだけピアノを上手に弾ようとも伝わらない。それまで失業率が一パーセント上下するたびに右往左往していたが、今回の伸びは半端じゃない。様

々な国で様々な対策が執られたらしいが、それがどのような対策なのか僕は知らない。僕はテレビを見ないし、見たとしてもよくわからなかっただろう。テレビに聾者対策なるものは施されていなかった。

数え挙げればきりが無いが、一番のネックが意思の疎通であった。情報交換と言いつてもいい。人が情報を集める方法はいくつかある。その中で最も多用されるのが視覚と聴覚だ。電話然り、テレビ然りだ。不思議なことに視覚に異常を訴える人間はおらず、最近までは口の動きで何とか意志の疎通を図ってきた。しかしそれも長くは続かなかった。耳が聞こえなくなると声を忘れるという。そう、口の動きが思い出せなくなってしまったのだ。

今ではジェスチャーが母国語となり、顔色を窺うような生活をしている。そして、この病が発症してから二年が経過するが、回復する目途は立たず治療方法も一切見つかっていない。

第二話 無常なる無音の日々 上

高校三年生に見事進級することができた。きっと大学に進み、社会に飛び立つのだろうと思っている。無音の病が発症し世界に定着してはくれたが、それで世界が安定したわけではない。これから世界の常識がことごとく変容していくだろう。

けれどその事象に頭を捻らせるのは僕ではなく世界の指導者たちだ。これから彼らの活躍に期待しよう。テレビではアナウンサーが手話をするようになったり、字幕が頻出するようになっていくらしい。僕が何もしなくとも、世界は流れていく。

というわけで僕は高校に登校する。今日は三年生初日、クラスが発表される日だ。長期休暇の気怠さと里帰りのような新鮮さがうちから漏れ出ているのがわかった。僕もまだまだこどもだ。

家を出ると隣のおばちゃんに会った。どうやらごみを出した帰りのようだ。愛想のような笑いを浮かべたので、儀礼的に頭を下げる。おばちゃんは無音の病にかかったのはごく最近、この近辺では一番遅かったらしい。それまでは小さなことでヒステリックになっていたらしいが、今では随分と丸くなってしまった。彼女の頭の中で何らかの損得勘定が働いたのだと僕は推測する。逃げるように家の中に入っていくのを尻目に、僕は門を出た。

通学路を歩いている間にも多くの人とすれ違う。犬の散歩をしていたり、早朝ランニングをする元気なおじいさんもいた。たまに自転車に乗って通学する学生も見られたが、乗り物に乗る人間は極端に減っている。道路で大の字になるのは危険だけど、信号はあまり意識する必要がなくなった。機械的に点灯を繰り返すだけであり、それに従って動きを止める鉄の塊は見ることもできない。音楽関係だけでなく、自動車業界にも不況の波が訪れているようだ。

校門を抜けると我が母校。昇降口の横に大きくクラスが張られている。その前にはまだ誰もいない。喧騒から避けるため、こういっ

た日には誰よりも早く登校するのが常だ。喧騒とは無縁になってもその癖は消えない。自分のクラスを確認して校舎の中に入った。

クラス掲示の横に今日のスケジュールが記されていた。そこには「校長先生のお話」と組み込まれていたが、いったいどうやって伝えるのか僕にはわからない。少し前までは全校生徒の一部が無音の病に罹^{かか}っていたが、もはや無音の病は病でなくなっている。それともまだ校長先生にとっては病なのだろうか。幸運なのか不幸なのかわかりにくい。その感覚はもはや誰も理解できない。

教室にはやはり誰もおらず気配もしない。名前順に座るであろうことを想定して自分の席に座った。朝の透明感のある陽光は心地よく、触れると体内の膿を削ぎ落とされる快感を得ることができた。きつと聴覚に頼らなくなっただけ他の感覚が鋭敏になってきているんだろう。陽光に指先を絡めながら貴重な一時を満喫していた。

「……………」

扉が横にスライドされる。音もなく、彼は教室に飛び込んだ。文字通りに、飛び込んできた。

「……………」

突然の闖入者ではあるが、僕はたいして焦ることはない。理由は二つ、ひとつは彼がこのクラスであることをすでに確認している。もうひとつは、彼は元々こういう珍妙なことをする人間だからだ。

教卓の前まで滑り込んでくると、彼はなにやら口を動かしている。決め台詞を口に行っているのはわかるが、その内容は一切伝わらない。この無音の世界で僕の知る限り口の動かし方を忘れていない唯一の人間だ。決め台詞を言い終わると満足したのか、僕に向かってなにやら口を動かした。たぶん「おはよう」だろう。片手を挙げて朝の挨拶に代えた。

僕の前のいすに逆向きに座ると、彼は懷から手帳とペンを取り出しなにやら文字を書く。それを僕に見せてきた。

『今日はどれぐらい登校してくるかな？』

手帳とペンを受け取り、一行空けて返事を書く。

『いくらが増えるだろう。慣れてきた人も多い。女子はわからないけど』

病が発症してから当然のように治安が乱れた。その中でも特に槍玉に挙げられたのが、強盗と性犯罪だ。

犯罪者が最も警戒するのは人目であるが、音も犯罪を成功させる重要なファクターである。音は人目を引き付ける。人を誘拐するときには夜道で口を塞ぐのが常套手段。足音を忍ばせるのは犯罪に限らず、様々なことで応用するだろう。けれどこのスキルはもはや誰もが実践できてしまう。極端な話、真後ろで人が惨殺されようとも僕は気づくことができない。いくら叫び声を上げようとも、気づいて駆けつける人間は皆無。

おかげで夜はもちろん、昼間であっても女性の一人歩きは危険極まりないのだ。

『楓は変わらないな』

ここのすかえで
鴻巣楓。

それが僕の名前。とはいっても、もはや名前は書類上で分類されるための記号に過ぎない。複数の人間と話すことは稀であり、仮にその機会があっても視線で水を向ければ事足りる。筆談は複数の人間との会話には向かないのだ。

『僕は夏紀のほうが変わらないと思う』

あきぐち なつき
秋口夏紀。

闖入者であり珍妙であり珍奇な同級生の名前。顔つきは黙っていれば女子に人気がありそうではあるが、子供がそのまま大人になったという言葉を体現している存在。といっても、頭が鈍いわけではない。わざと道化を演じているのでは、と思ってしまう一面もある。そのたびに夏紀はおどけてそらしてしまうのだが。

夏紀は苦笑するだけで何も返答せず、昨夜近所で発生したらしい交通事故の概要を書きつらった。僕はそれに対してあまり興味が湧かず、適当に相槌を打つだけでペンはとらなかった。

予鈴が鳴る頃には（もちろん音はしない。教室備えつきのランプの点灯がその代わりになっている）教室内にそれなりの人間が集まってきた。満場一致に全員出席とまではいかないが、不良を除きたいという人間が集まっている。どうやら女子は一塊になって登校したらしい。やはり大変だな。

想定通り名前順に座ることになった。教師が今日のスケジュールを黒板に書いている。退屈な始業式を体育館で行い、教室に戻ってきて解散。まあ、これも想定通りだ。教師の合図で僕らは体育館に向かった。

無常なる無音の日々 下

さて、本日の学校行事の過半数を占める始業式。もちろんこれは新生がメインとなり、僕らは人数合わせのようなもの。体育館に向かう足取りも、期待と緊張で動きの鈍い新生とは異なり、気怠さと憂鬱で鈍くなってしまうのも無理もない。どのような時代であろうとどれだけ世界が変わろうとも校長先生の話ほど退屈なものはない。どのような形式で話を進めるのか気にはなっているが、おかた想像がつく。意識せず、足取りは重くなる。

隣を歩く夏紀を横目で見ると、夏紀の右手には文庫本が握られていた。いくら夏紀が珍妙な存在であっても校長先生の話を楽しむことはできないようだ。夏紀がはにかんでいるのはこれから読書をすることができるからだろう。あとで本のタイトルを聞いておくか。

そして始業式はやはり僕の想定通りに行われた。

新生はあらかじめ配布されていたプリントの通りに座り、生徒全員にプログラムが配布された。その中身には有難いことに校長先生のお言葉がつつらと書き連ねられている。数十分後にはゴミ箱を埋め尽くすであろうプリントを眺めていると、どうにかして再利用できないか考えてしまうのだが、やはり良いアイディアは浮かばない。新任教師や簡単な部活動紹介欄に目を通してポケットに仕舞った。

教師陣には明確なマニュアルが配られていなかったようであり、舞台の上では下手な子芝居が繰り広げられているようにみえた。司会進行にマイクを用いることはもちろんできず、プロジェクタを使用していた。けれど、そこに浮かび上がるものは映像ではなく文字。しかも映しているものは配布されているプログラムである。新任教師の名前を映し、その名の教師が頭を下げる。そして次の教師の名を……。欠伸が出た。目の端では失笑している生徒もいる。夏紀にいたってはプログラムを放り投げ読書に耽っていた。途中までは緊

張に身をおいていた新入生も、ついには姿勢をくずしはじめる始末。致し方ないさ。教師の何人かは憤りよりも恥ずかしさに身を縮めている。その中で、ひとりだけ凜とした佇まいを維持している教師がいる。たぶん新任教師だ。若いな。使命感かなにかだろう。残念ながら名前は見そびれてしまった。あとでプログラムを読み直そう。

　　どうか始業式と入学式は違うのだろうか？　僕が入学したときは、始業式とは別に入学式が開かれていたはずだ。とすると、新入生もこの退屈な儀式は二度目ということになる。入学式はどんな形式で行われたのだろう。確かひとりずつ名前を呼ばれたような記憶があるが。気が向いたら調べるとするか。

　　どうやら終わったようだ。儀礼的に拍手を送る。

　　音はしないけれど、暖かさは伝わったんじゃないかな。

第三話 ツアーに行こう

『この本はすばらしいよ』

始業式を終え、ホームルームも終えた放課後。いくらか生徒の残る教室内で夏紀が興奮冷めやらぬ中ペンを走らせた。

『ただ単純な恋愛小説かと思っていたけど、これほどまでに読者の意表をつくとは思わなかった』

『そうか、それはよかった』

『もしもだよ、もしも主人公がヒロインに冷たく接したらどう思う』

もしも、だなんて仮定法を使っているが、それは十中八九その小説の内容であろう。それにその尋ねかたならば、王道パターンでないことは明白だ。

かといって、僕は空気が読めないわけではない。ペンを受け取る。

『ヒロインのためにわざと悪役を演じたんだろ』

僕の記述を読んで夏紀は、してやったり、というような笑みを浮かべた。

『それが違ったんだ。もしそうならオレは最後まで読まないよ。予想に反し、主人公はまさに悪役だったのさ。ひどい男だよ。かわいいヒロインがぎりぎり怪しむように浮気の証拠を仄めかすんだから』

仄めかす、なんて漢字を無理なく書き記すあたり、やはり夏紀は

ただの馬鹿ではない。そして世間において自分を軽んじさせようとしているのに、そういういった言葉を滲ませてしまうのは、迂闊というべきか鈍いというべきか。

『とすると、その小説はバッドエンドで終わるのか』

『いやいや、そんな単純なものではないんだ。驚いたことに恋敵がヒロインの恋人になってしまふんだよ。たいていの小説で主人公のライバルであり恋敵というものは、得てして恋愛の勝者になることはできない。なのにこの小説の中では勝者になってしまふんだ。それもごく自然に当然に』

僕の中で確固たる事実が出来上がった。もうその小説を開くことはないだろう。

『しかもこの主人公がずる賢いというか小賢しいというか。ヒロインに対しては気持ちが残っていないながらもしぶしぶ冷たい対応をしている、というような痕跡を残す。そしてライバルには完全な悪役としての顔を見せるんだ。ライバルとヒロインは食い違いすれ違い、読んでてハラハラドキドキだよ』

僕は筆箱からペンを取り出す。放っておくと余白が続く限り書き続けそうだ。

『それはよかった。それで？　ただ感想を伝えにきたわけじゃないだろ』

僕の文章に夏紀は驚きと苦笑が入り乱れたような顔を見せた。ペンで手帳を叩くと、わずかばかり喜びを含んだ表情でペンを走らせる。

『久しぶりに文勢堂ツアーに行かないか』

その記述も久しぶりだが想定通り。考えるまでもない。どうせ放課後は暇なんだ。

夏紀との文勢堂ツアーは久しぶりだ。僕らは仲が良いほうだが、休日に互いの予定を合わせるほどではない。となると、たぶん二年の三学期以来ということになる。

ツアーなどと大仰な言葉を使っているが、近所の書店に立ち寄り、購入した本を喫茶店で読むだけのこと。その書店が文勢堂というためこのネーミングなのだ。もちろん言いだしっぺは夏紀。

僕の家と学校のちょうど中間地点にある文勢堂は、この辺では最も大きな書店。教科書の販売やこの近辺の受験生はここで参考書を購入する。学校帰りに立ち寄ると必ずといっていいほどの制服を見かける。だからなのか、僕はあまり進んで入りたい店ではない。やましいことがあるわけでもないが、知り合い以上友達未満の人間がいるのはあまり気分がいいものではない。

僕がこの書店に入る理由は三つ。文房具の購入、文勢堂ツアー、そして紅葉もみぢという女に呼び出されたときだけだ。

花坂紅葉は他校生であるが、夏紀とは小学校が一緒の幼馴染。そして文勢堂でアルバイトをしている。夏紀とのツアーを重ねるうちに顔見知りとなり、いつしか紅葉もツアーに加わるようになった。紅葉が僕を呼び出す理由は往々にして新作本を読んだときに滲み出る感情の発散。要は愚痴だ。無音の病に罹ってから回数が減った

が、それでも月に何度か呼び出しをくらう。文字で己の気持ちを表現するよりも感情でものを言うタイプであるから、文章で気持ちを伝えるのに煩わしさを覚えているようだ。結局、最後にはジェスチャーで感情を伝えようとしてくる。

文勢堂に行くと、今日も紅葉はアルバイトをしていた。レジで伝票整理をしていたが、こちらに気づくと笑顔をみせ、手招きしてくる。その手には紙とペンが握られていた。

『これからあそこ行くんでしょ？ 私も行くよ。あと少し待ってて』

夏紀がすでに話を通していろいろだ。僕は頷いた。

紅葉はロングの黒髪を無造作に後ろで結んでいる。身長は女子にしては背が高いほうで、エプロンがよく似合っていた。幼い頃から剣道を嗜んでいるらしく姿勢がいい。活発な町娘を連想させる笑顔をもっている。

邪魔になっては悪い。とりあえずアルバイトが終わる時間まで本を物色することにした。夏紀は迷わず小説コーナーへ滑り込む。何冊か手にとり、裏表紙のあらすじを読んでは次の本へ、それが終わるとカニ歩きで次の棚に移る。こうなってしまうえば声をかけるのは野暮というもの（まあ声はかけられないけど）。僕は適当に店内をぶらつくことにした。読みたい本は特にない。興味本位に何冊か手に取ったが、目を惹く本は見つからなかった。

そのうちの一冊に、夏紀が読んでいた本を見つけた。タイトルは「ふりしきる嵐の気配」 とてもじゃないが題名からは恋愛を想像できない。何かと問われればアクションか、冒険ものを連想させる。一応、あらすじを読んできた。

《しずきの冷たい態度に感情を凍らせてゆく姫菜。勝久の思いに気づきながらも、姫菜はしずきを忘れることができない。しずきの愛

を求めて、姫菜はしずきの跡を追う。そこで目にしたのは、勝久としずきの決闘だった》

読まなくてもよかったかもしれない。あらすじを見ただけで読む気の失せる、もとい先が読めてしまいそうな展開。意表をつくドラマを用意しているようだが、これでは購入意欲が殺がれてしまうだろう。もっと頑張ってくれよ編集さん。

結局僕は手軽な料理本を開いて暇を潰すことにした。近年世間の料理に対する反応は、ついに男性と女性の垣根を越えてくれたようだ。料理を嗜む身としては嬉しい限りである。今度は日常的な家庭料理ではなく、中華に手を出してみよう。

そんなことを思っていたら、肩を叩かれた。振り返ると、購入したばかりの本を脇に抱えた夏紀、制服に着替えた紅葉が肩を並べていた。紅葉は僕の読んでいる料理本を指差し買うのかどうか尋ねてくる。首を振って料理本を棚に戻す。出口を指差した。

ようやく、午後になった。お腹すいたな。

第四話 ココアをさがせ！ 〈問題編〉

僕らが訪れるいつもの喫茶店、喫茶 「ホトトギス」 その店名の通りに、店内にはホトトギスの剥製が飾られている。その他にも切り株や、白地に紫の斑点が入った小さな花の絵が飾られている。自然の安らぎをテーマにした店内だ。古ぼけたラジオがカウンターの横に設置されているが、これだけは店にアンマッチだと思う。このマスターはまだ若く、おそらく二十代後半。それか若作りの三十代といったところだ。

店内の一番奥の席。ここは僕らの特等席だ。ここならば店長以外誰の目も届かず密談をすることができる。といっても密談などもはや不要なのだが。

僕はコーヒー、紅葉はカフェオレ。夏紀はココアを頼み、一息ついた。僕らはそれぞれ紙とペンを用意して会話を交わす。もはや不自然ない光景だ。

『今日が始業式だったんでしょ？ なにか特別なこととしてた？』

『特になに。予想通りプロジェクタを使ってたぐらいだ。きっと紅葉のともたいたし変化ない寸劇を繰り広げてくれるさ』

紅葉はこの近辺に存在するもうひとつの高校、杜若女学院かきつばたに通っている。僕らの高校は共学だが、彼女の高校は名前の通り女子高だ。始業式の日程も一日ずれている。春休みが一日長いわけではなく、僕らよりも一日春休みが始まるのが遅かったのだ。

ちなみに夏紀はすでに本を読み始めている。さすがは読書家。

『紅葉の高校はもっと大変だろうな。女子高なんだから』

紅葉は拗ねたように唇を尖らせ、ペンを握りなおす。

『危ないのはもとからだし、別に私はそんなこと思っていないよ』

紅葉は男女差別反対派の筆頭。彼女はことさら女扱いされることを嫌うのだ。剣道を嗜んでいたのは、彼女が道場の娘であったためゆえに物心つく頃にはすでに竹刀を握り締めていた。夏紀はその道場の門下生。なんでも幼い頃の夏紀は鼻っ柱の強いガキ大将であったようだ。道場に入る理由も、それは子供らしいくだらない理由だったという。そしてその鼻っ柱を叩き折り、ついでに半ベソかかせたのが紅葉。その日以来、夏紀は丸くなり、紅葉は勝気な女の子へと成長した。

そういえば夏紀が紅葉に勝ったという話は聞かない。

『それによく知らないけど、うちの高校のスポンサーがセキュリティ上げてくれたらしいからね、ずいぶんと居心地悪くなったよ』

『警備員がうろつくとか？』

『そんなもんじゃないよ。学校はカードキーがないと入れなくなっ
たし、タクシー会社と契約して、送り迎えのサービスまでしてるぐ
らいさ』

それは羨ましい。是非とも我が母校にその制度を導入してはくれないだろうか。

『隠そうとするから見たがるんだよ。堂々としてればいいのにさ』

『さすがは道場の娘。書くことが違う』

僕の文面を見て、紅葉は照れくさそうに笑った。褒めたつもりじゃなかったんだけどな。

マスターがコーヒーを持ってきてくれた。爽やかな笑顔はいつもどおり、僕らの前に飲み物を置いた。続けて砂糖の小瓶を二つ、ミルクの小瓶も二つ置いていく。音が無くなっても、マスターは変わらず音を立てないようにカップを置く。慎重な手つきであり、けれど鈍重な動きではない。洗練された妙技のように思えてしまう。爽やかな笑顔と完璧な会釈で戻っていった。

僕は料理をするが、その味にこだわりを持っているわけではない。おいしければ良し、まずくても栄養があれば良し、だ。だから高い金を払ってまで高級なものを食べようとは思わない。これを紅葉は貧乏性と記す。まあ否定はしない。

けれど、この店のこのコーヒーだけは別だ。別格だ。通を気取るわけではないが、僕の味覚はインスタントコーヒーではもう満足することができない。このコーヒーを啜る瞬間こそ、至福の一時だと断言することができる。砂糖やミルクなど無粋なものは加えずに、ただそこにある黒い液体を体内に浸透させることが嗜みであり、また礼儀であろう。残念ながら紅葉はともかく、甘い物好きの夏紀はこの味を理解してはくれないが。

『それでも夜歩きは避けるに越したことはない』

そう書いて見せると、やっぱり紅葉は納得のいかない顔でカフェオレに砂糖を二つ放り込んだ。続けて僕は記す。

『犯罪に防犯意識を巡らすのは悪いことじゃないだろ。過剰すぎるのはよくないが、銃弾の雨の中に身をさらすような行為は、被害者にも非があると言わざるを得ないね』

『わかったわよ』

『ということで、これからは僕の家まで送ってください』

額をペンで突かれた。これが結構痛い。長年の剣道の腕は衰えをみせず、むしろ磨きがかかっている。きっと僕の額にはペンの痕がくつきりと残っていることだろう。紅葉は怒り笑いの表情をし何やら口走っているが、夏紀と違いまいちよくわからない。たぶん「逆でしょうが！」とか、「あんたは男でしょ！」とかだと思ふ。なんだかんだいって強がっても、やっぱり紅葉は女の子なのだ。

そんな僕らのやり取りを見ていたのかいないのか、す、と横から紙が差し出された。その紙の主は夏紀であり、不審気というより訝しげに僕と紅葉を見比べている。いや、正確に言えば、僕と紅葉のカップをだ。

『ふたりの飲ませてくれない？』

割と真剣みを帯びた夏紀の表情に、僕と紅葉はお互い目配せをしてカップを差し出した。夏紀はまず僕のカップに手を伸ばし、一口啜る。その表情は歪めたままだ。

次に紅葉のカップにも手を伸ばし、啜る。表情は一瞬緩んだ気がしたが、またすぐに眉に皺を寄せた。

意図がつかめず、僕は紅葉に視線を向けた。けれど紅葉は首を傾けるだけ。やはり意図がつかめない。

最後に夏紀は自分のカップを啜り、やや乱暴にペンを走らせた。

『これはココアじゃない。コーヒード』

ココアをさがせ！　〈解決編〉

夏紀は自分のカップを僕らに差し出した。それは一目見ただけでココアではない。けれど新メニューに「コーヒー似ココア」なるものが存在するのかもしれない。一口啜ってみた。うむ、やはりコーヒーだ。僕にとっては丁度よくても、夏紀にしてみたら地球に下駄を履かせるぐらい驚いたことだろう。一応紅葉にも飲んでもらったが、やはり僕らの味覚障害ではないようだ。

『マスターが間違えたのかな？』

紅葉がおそろおそろ書き記す。天変地異の預言書を書き記すような自信の無さだ。そしてその自信の無さは僕も同様に感じていた。

僕らのこのツアーはもうそれなりの回数を踏んでいる。僕がこの店を知ったのは中学生の頃。それからばかりでこの店を訪れることもあり、夏紀と出会ってからさらには回数が増えた。その上、紅葉と二人で来ることもある。僕個人でさえ、すでに五年近くの付き合いなのだ。その五年もの付き合いの中で、マスターがミスをしているところを一度も見たことがない。彼はお皿一枚、スプーンひとつ落していない。もちろんそれは僕らが目にしている範囲なのだが、そんなマスターがオーダーミス。これは無音の病発症以上の驚天動地だ。

『マスターはオレが甘いもの好きなの知ってるのに』

夏紀も訝しげに歪めた表情を解き、不思議そうに首を傾けている。その通りだ。まだ無音の病が流行る前に僕らはこの店に来ている。すでに常連となっているし、いつもの、と記せば僕にはコーヒーを、夏紀にはとりあえず甘いものを出してくれる。紅葉はいろいろなメ

ニューを頼むため例外だが。

『けど、絶対にコーヒー頼まないわけじゃないでしょ？』

『そりゃあ、砂糖はたくさん入れるけどね』

『マスターも忙しかったんじゃない？』

紅葉の穏当な記述はありがちだ。いかにマスターといえど、目の回るような忙しさの中では間違えてもおかしくはない。

首を伸ばしてマスターを窺う。マスターはゆったりとテーブルを拭いている。とてもじゃないが忙しいとは思えない。

『これに慣れてないんだろ』

僕は自分の耳を指差し、紙を見せた。

けれどこれには夏紀が首を振る。

『マスターは流行する前に対策を練ってたよ。楓と紅葉でその訓練に付き合ってたし』

それもその通りだ。僕が発症したのが高校入学直後。その次に紅葉、そして夏紀だ。僕と紅葉の発症時期はかなり早期であったため珍しがられたが、夏紀とマスターはかなり遅かった部類に含まれる。夏紀の後にマスターが発症したらしい。けれど初例から一年もしいいうちにほぼすべての人の感染が認められているはずだ。

よくよく考えてみると、無音の病が広がってまだ二年しか経っていないのか。それなのに随分早く世界は安定したものだ。予期していたのか？ まあこれは後々考えるか。

『一年以上前から対策練ってたんだから、慣れてないってことはないんじゃない？』

そう記して、夏紀は僕の記した『これに慣れてないんだろ』に大きくバツ印をつけた。そしてついでのように紅葉の『忙しい』にもバツ印をつける。

腕を組んで大きく息を吐いてみた。ふむ、では注文したときのことを思い出してみよう。

この店内に入り、当然のように僕らはこの席に着いた。これはいつものことであり、マスターに目配せしたが問題はなかったはずだ。そしてマスターがおしぼりを持ってくる。この段階でまだオーダーは決まっていなかったのだ。（紅葉と夏紀が）、マスターはカウンターに戻る。そして決まったときにテーブル備え付けのボタンを押した。前は音を発していたが、今ではランプが点灯するだけ。カウンターから見える位置に連動して光る仕掛けが施されている。それを見たマスターがオーダーをとりに来た。ここまではいい。きつとここからが重要だ。

昔は夏紀が全員のオーダーを言っていたが、今ではメニューに指を差してマスターにみせる。マスターは僕らの顔とメニューを交互に見てメモを記した。そしてそのメモは僕らのテーブルの端に置いている。そのメモを引っくり返してみると、そこには「コー2、カフェ1」と卓番が書いてある。これはホットコーヒー二つ、カフェオレ一つを表しているのだ。もしもアイスコーヒーが飲みたい場合、メニューのアイス欄を指差せば事足りる。んん？　そうか。

僕は手を振り二人の注目を集めた。

『メニューの位置じゃないか。コーヒーとココア、それにカフェオレは隣同士。指を差す位置が微妙にずれていたのなら、勘違いしてもおかしくない』

二人はメニューと僕の記述を見比べた。紅葉は頭を捻らせているが、夏紀は首を振った。僕の記述の下にペンを走らせる。

『そうだとしても、普通確認するよ。それにオレが甘いもの好きなの知ってるんだから、微妙な位置を指差したらココアを持つてくと思うな』

ごもつともだ。けれどこれはいい線なんじゃないか？ 指を差す以外に注文する方法はないはずだし、ならばそこでしか間違えようもない。

『もしかしてさ、他の人のオーダーと勘違いしちゃったんじゃない？』

紅葉の記述に僕は首を振った。

『そうするとこのメモの卓番が違う番号のはずだ。この卓番でコーヒー二つと書いてあるから、オーダーの時点ですでに間違えていたんだ』

『それじゃあ、私じゃなくて夏紀がカフェオレを飲んだと思ったとか？』

ふと、考えてみる。それなら辻褃が合いそうだ。きっと紅葉は何の考えもなしに書いたんだろうけれど、それなら間違える理由にもなる。夏紀はコーヒーよりもカフェオレを頼む頻度のほうが圧倒的に多いし、紅葉はオーダーに脈絡がなく気分で頼む。もちろんコーヒーを頼むことも多い。でもこの説を肯定するとなると、紅葉と夏紀の両方がメニューの曖昧な位置を指差した、あるいは間違っ指差したことになる。まったく言えないけれど……。

『だめだ、ミルクと砂糖の小瓶が多すぎる』

飲み物を持ってきたとき、マスターは砂糖とミルクの小瓶を二つずつ持ってきた。そしてそれがまだ机の上にある。僕がコーヒーをブラックで飲むことは知っているし、紅葉も極端な甘党ではない。小瓶はひとつずつあれば事足りる。二つも持ってきたということは、やはりマスターは夏紀がコーヒーを飲むと思っていたのだろう。

『!!!!!!!!!!!!!!』

『いや、それは書かなくてもいい』

紅葉はだんだん飽きてきたようだ。夏紀も頭を掻いて思案しているように見えるが、視線がちらちらと本に向いている。言いだしっぺなだけに切り上げるのが難しいのだろう。

つまり、頼みの綱は僕だけだということだ。

もう一度要点を整理してみよう。店内は忙しくはないし、仮に忙しくともマスターはミスをするような人ではない。慣れていない点もすでに攻略していると思われる。夏紀が甘いものの好きなのは知っている。かといって絶対に夏紀がコーヒーを頼まないわけではない。けれどそれは稀であり再確認をしてもおかしくない。それにマスターはオーダーのときに、メニューと僕らの顔を交互に見て確認している。指先の位置が曖昧だったら確認ぐらいするだろう。病が流行してからオーダーの繰り返しはしなくなったが、それをしなくても間違えるようなマスターではない。

結局マスターの珍しい勘違いなのか、と結論付けようとしたとき、つんつんと横から突かれた。ひじについて口を半開きにした戦意喪失、戦線離脱を果たした夏紀が、いかにも適当に書いたと思われる文字をちらつかせていた。

『そういえば、マスターがオレの顔を見て驚いてた気もするよ。オーダーのときに』

『?????????』

『いや、それは書かなくてもいいよ』

『まあ、夏紀がコーヒーを頼んだと勘違いしたんだから、驚くだろうな』

んん？　なにか引っかけたな。なんだろう、ちょっとしたことのような気もするが、重大なことのようないきなり。ええと、なんだったか、夏紀が書いたのは、

『そういえば、』

『マスターが　俺の顔を見て　驚いてた気もするよ』

顔？　どうして顔を見て驚いたんだ。妙なオーダーをしたなら、顔よりもメニューを見て驚くんじゃないか？　でもそれは微妙な違いだから誤差の範囲内と言えるかもしれない。メニューを見て驚いて夏紀の顔を見た、ということかもしれないし。でも驚いたのなら、どうして再確認しなかったのだろう。それとも再確認したのか？　気づかれないように？　メニューを指差す以外じゃ確認しようがないはずなのに……、まてよ。

『夏紀、もしかして』

こつこつと机をペンで叩いた。

『注文するとき、コーヒーって言ったか?』

記述を見て、夏紀は不思議とも呆れともとれる表情をみせた。

『いまさら何書いてるんだよ』

『悪い、訂正する。コーヒーって口を動かしたか?』

僕の記述を覗き、上を見上げて、下を見下ろし、メニューを窺い、僕の顔を見て、はっとする。

『そういえば、動かしたかもしれない。なんでだろう、昔の癖がでたのかな』

夏紀は全員の飲み物を頼もうとした。コーヒーが最初だったのはただの偶然だろう。

考えがまとまった。これが真相か。僕はペンを取り、戦線離脱している夏紀と、紙に絵を描き始めている紅葉の注目を集めた。

『夏紀は指を指す位置が曖昧だった。きっとマスターは確認しようとしたんだろう。けれど、夏紀の口が「コーヒー」と形作った。夏紀は僕が知る限り、口の動きを忘れていない唯一の人間。マスターはかなり遅い段階で病に罹ったはずだ。ならば、唇の動きを覚えていても不自然ではない。つまり、夏紀の口の動きで再確認したんだ』

二人は感嘆の溜息を漏らした。

『つまり、』

夏紀が記す。

『オーダーミスってことだね』

夏紀はボタンを押す。爽やかな笑顔のマスターが召喚された。

ココアをさがせ！〜解決の解決〜

夏紀が小説を読み終わるのを見計らい、僕らは店を出た。その後はそれぞれ気の向くまま風の流れるまま、遊びに行くこともあるが、解散することもある。明日に始業式を控えている紅葉のこともあり、今日は解散するはこびとなった。二人で紅葉を自宅まで送り、僕と夏紀は別れた。去り際に、紅葉は嬉しそうな、けれど悔しそうな表情を見せていたのが気にかかった。

そして僕は喫茶店「ホトトギス」のカウンター席に座っている。夕方には早く、お昼には遅い時刻。店内もピークを過ぎ去り、閑古鳥が鳴いている。僕が再び来店したことに軽く目を丸くしたが、すぐにカウンター席へ案内してくれた。二組の紙とペンを取り出し、片方を僕に差し出してくる。

『どうしたんだい？』

『昼、食べてないんです』

僕の記述を見て、マスターはすぐにランチメニューを出してくれた。ランチは過ぎているが、作ってくれるようだ。その配慮には感謝するが、僕は片手を挙げてそれを制した。ペンを走らせる。

『その前に、少し、話をしましょう』

マスターは満足そうに頷く。もしかしたら僕がこれから話そうとすることに察しががついているのかもしれない。マスターは頭もよく察しがいい人だ。学生時代の話はあまり聞かないが、それなりにいいところを出ているらしい。話をしても、その内容の奥深さにはいつも感服している。

幸いなことに店内にはお客がない。マスターもコーヒーを作る傍ら、イスに腰を下ろした。カップを2脚用意しているということは、片方は僕のか。

『サービスだよ』

『どうも』

少しばかり気にしていた。助かります。

『話は、オーダーミスのクレームかな？』

『そうです』

話が早い。おどけて笑っているのは、どうにかして話を逸らそうとしているからなのだろうか。この人の内面は読めない。笑っていても心の中で泣くことができる人だ。雲のように自由に掴み所のない人間、というのはきつとマスターを表す言葉だろうなと思った。

『僕は不思議に思っていました。どうしてマスターがミスをしたんだろうって』

『あれは申し訳なかったね。君たちの好みは把握していたから、しっかりと確認すべきだったよ』

『確認はしたんじゃないですか？』

一度ペンを止めて、僕はマスターの顔を窺った。表情は変わらず微笑んでいるように見える。

『夏紀の唇の動きで』

『すごいね』

マスターは嬉しそうに笑う。

『ついつい昔の癖でね。どんな唇の動きでもわかるわけではないけど、メニューに載っているものは、わかってしまうんだ』

なるほど、確かにメニューに載っている言葉だから、マスターも勘違いをした。

『もうあんなことはしないよ』

『そうですよ。驚きました』

僕は微笑んだ。ちょうどコーヒーが出来上がる。立ち上った湯気が優しく鼻腔をくすぐった。

『でも、不思議はそれだけじゃないんです』

マスターはさらに笑みを深めた。期待しているのか、頷いて先を促す。

『紅葉と夏紀にはマスターが唇の動きで再確認した、ということに納得させました。けど、僕はやっぱり納得できません。いくら唇の動きがわかったからといっても、それで判断するのは早計だと思います。普通は確認すべきです。こんな世界なんですから、なおさら』

『忙しかったからね。少し焦っていたんだよ』

『マスターは忙しくてミスをするような人ではありませんし、今日はそれほど忙しかったわけでもないでしょう。僕は一度もマスターがミスをしているところを見たことはありません』

一度も、と僕は強調した。思わず丸印までつけて。

『よくよく考えてみたんです。いくらなんでもおかしいだろうって。健常者が突然難聴を訴える。僕自身体験していますから、その苦しさとか不便さなんかわかっているつもりです。意思疎通ができなくなるのはもちろん、うまく歩けなくなることだってあるんですから。それなのに、マスターはいくら対策を練っていたからといって、そんなにうまく順応できるものなのか。もしかしたら、何かしらの機器を使用しているんじゃないか、そう思いました』

マスターは両手を広げ、立ち上がって一回りし、さらに耳までよく見せてくれた。不思議なものはない。

『僕がこの病に罹ってから、夏紀に助けられることがしばしばありました。夏紀の口を通して病気の進行具合を知りました。誰が罹った、誰はまだだ、とね。でも、マスターが罹っているとは聞いていません。直接マスターから聞いたわけじゃないし、もちろん夏紀も知りません。単純にもうみんな耳が聞こえないんだろうなっと思っていました』

僕はカウンターの横にあるラジオに触れた。無骨な印象を与える黒々としたそれは、僕の指に温もりを返してくれた。さらに、中では何か動く振動を感じた。

『マスターの耳は聞こえるんですね』

僕の記述を覗きこみ、安心したような吐息を吐くと、マスターは拍手をした。僕には聞こえない。けど、きつとマスターには聞こえている。マスターの唇が動いた。たぶん 「正解」 だろう。

『驚いたよ。その通り、私の耳は聞こえている。夏紀くんは私が知る限り唯一、音を失っても正確に声を出せる子だよ。だからあの時は驚いた。夏紀くんがコーヒーを指差して、コーヒーと発音したのだからね』

マスターはクツクツと笑う。僕もつられて笑った。

『これまでもなかったわけじゃないけど、春休みの間は一度も来店してくれないから、うっかり忘れていたんだ』

『僕らは声を出せているんですか？』

『何人かはね、けど話さない人のほうが圧倒的に多いよ。無理もないね、話す意味がないんだから』

『ちなみに、』

僕は尋ねていいのかどうか迷った。けれど、やはり尋ねないわけにはいかない。

『ちなみに、マスターのほかにはいるんですか？ 音を失くしていない人が』

『いないよ。私だけだ』

僕が書ききる前に、マスターはむべもなく書き綴った。

はつきりと、ばつさりと、希望を捨てたかのように。

それは、どんな気持ちなのか。誰もが音をなくしている中で、マスターただ独りが音を失くしていない。別に赤信号みんなでわたれば怖くない、というつもりはないし、日和見主義がいいというわけでもない。けれど、やっぱりそれは寂しいんじゃないだろうか。そこに存在するはずの喧騒が、マスターには聞こえてしかるべきはずの喧騒は、もはや誰の耳にも届かない。人込みに紛れようとも、誰一人声を発する人がいない。死者の行進のように、マスターの耳に届く。横断歩道の真ん中に取り残されているような疎外感。あるべきものがない辛さ、それはもう、僕が感じ取ることとはできないもの。

『悩む必要はないよ』

マスターが新しくコーヒーを淹れてくれた。

『音はない。でもね、私にはこれがある。このコーヒーがある。香るだろう？ 苦いだろう？ 温かいだろう？ 聞こえなくとも、伝わるだろう？ 音が消えた。けれど他に感じるができる。これまでに感じられなかったものがきつと伝わる。それが私を繋いでくれる。飲みにきてくれ、いつでもね』

マスターが淹れてくれるコーヒー。温かく、僕の心を癒す。口の中全体にいきわたらせるように味わう。まずは酸味が広がり、口蓋後方にいくと苦味が広がる。喉を鳴らせば、酸味と苦味が混ざり合い、絶妙な余韻を広げる。

これが、マスターのコーヒー。

『おいしいです』

マスターは笑って、メニューを差し出した。ランチメニュー。どれもこれも絶品であることを僕は知っている。

コーヒーに合うものを食べよう。やっど、お昼だ。

あとがき

すべての人間から音が失くなったと嘯いておきながら、いきなり音を失くしていない人間が現れるという、ある種裏技的なことが頭から行われてしまいました。さすがにこの後にこのようなネタを使うのは憚られてしまったため、おそらくこれ一回こっきりのことになるでしょう。けれど、辻褄あわせ、世界を十全に回すためにどうしても必要とあらばあるかもしれません。といっても、そうそう頻発してしまうと、やはりそれはどうなのかと疑問に思わなくもないので、これは裏技として懷の奥深くにしまっておくこととします。二度と現れることのないことを願って。

さて、これは書き始めは一作限りの小説にしようかと思っていたのですが、どうもこの先も書いてしまえそうな展開、そして続きがありそうな構想となっていました。決して嘆かわしいことではなく、むしろこれは望む展開になっているのかもしれませんが。この先、この世界がどのように転んでいくのでしょうか。ファンタジーにも恋愛にもそしてもちろんミステリーにも。実際問題、こうして筆をとってはいますが、主導権は私ではなく登場人物に握られているような感じもします。もともとこのようなミステリーを加えるつもりはなかったのですが……。途中で題名を変えてしまつて混乱してしまつた方もいるかもしれません。ここでお詫び申し上げます。そしてこの物語はこの先も続きます。これから先どのような展開落ち着くのか、まだまだ霧の中を歩く気持ちでいるのですが、まあいずれどこかの駅へ軟着陸してくれるでしょう。どうにも主人公が思い通りに動いてくれないのが齒がゆくもあります。だから面白いのかもしれないのですが。

ではまた次作にて、とりあえずは学園ミステリーに相成りそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728g/>

無音の世界～ココアをさがせ！～

2010年10月9日04時02分発行